序

横浜市にある神奈川県立循環器呼吸器病センター（通称，循呼センター）は結核療養所に端を発する．イソニアジドなど効果の高い薬剤が標準治療となり，かつての死に至る病は今や，完治を目標，が常識である．

現在の循呼センターには，全国から呼吸器内科エキスパートをめざす若手医師が集まり切磋琢磨している．その医師たちが「肺癌診療がおもしろくなった」と評するオンコロジーカンファレンス（略称，オンコカンファ）が循呼センターには存在する．そこでは，自身の受持ち患者さんを通じた診療経験と大規模比較試験のエビデンスとを有機的につなぐこと，知識でなく思考プロセスを身につけることに重きが置かれていた．まず，診断をすすめている新規患者さんのプレゼンを担当医が行う．次に病理診断，病期診断を経て当てはまったカテゴリーの標準治療とオプションについて整理．そこから身体状況や社会状況を含めた多面的な議論を重ね，複数の治療に関してディベートを行う．最終的に全員が挙手をして多数決でチームとしての推奨治療を決めるのである．担当医は1時間の議論を通じて，患者さんと向き合うだけでは得られない多面的かつ深い考察を得ることができる．次に患者さんに会うときには，オンコカンファでの結論も選択肢の1つとして，患者さんと対話して方針が決められている．

羊土社からの「肺癌診療の実践書を」とのお話に，オンコカンファの紙上での再現を考えた．オンコカンファを引き継いでいる池田慧先生に共同監修をお願いし，関根朗雅先生，佐多将史先生，下川路伊亮先生の3名にも企画に加わっていただいた．執筆者は肺癌の臨床・研究で今活躍している元気な若手，中堅にお願いし，カンファを再現する構成にご協力いただいた．また，カンファの途中で語られるtipsをコラムにまとめていただいた．原稿を読みながら，執筆者の皆さんが，施設で熱心に患者さんを診ていることがよくわかり，監修作業は楽しい時間であった．

今回の出版に際して，日頃の豊富な経験と知識をわかりやすく執筆していただいた執筆者の皆様に深く御礼申し上げたい．また，本書の企画にあたっては，羊土社の鈴木美奈子さん，野々村万有さんに，制作では阿部壮岐さん，中田志保子さんにご尽力いただいた．経験のないわれわれを常に支えてくださり深謝申し上げる．共同監修者の池田慧先生は全編を通じて企画，監修の中心となって牽引していただいた．その驚嘆すべき馬力に心底より御礼を申し上げる．

読者が本書を読み，考え，患者さんと話し合って最適な治療を探してくださること，そして遠くない将来に，肺癌の患者さんも，普通に完治をめざした治療が受けられる日が来ることを期待している．

2018年9月

監修者を代表して
加藤晃史